

## 海外出張の思い出（ナイジェリア編②）

高島敬明

前回は、成田空港からナイジェリアのラゴスに向かう途中、オランダのスキポール空港に到着したところまででした。順調にきた旅がここからが様相が一変しました。ラゴス行きの便に乗るまでがまず一苦勞でした。日本人が誰一人いなくなり、つたない英語がどこまで通用するかと思うと、不安が徐々に増してきました。

まず朝の食事を摂ろうと旅行バックを押しながら、あれこれ注文しなくて済む食堂を探し歩きました。何とか大学の食堂のような、進みながら自分の好きなものをピックアップして最後に料金を支払う、というレストランが見つかりました。やっと食べ終わり、次に何時間後に乗る B 番スポット搭乗口を確認しておこうと歩き始めました。アフリカのような航空路はローカル線なので端っこの方なのです。進むにつれて粗末な身なりの太った男女が歩いて来ます。なぜか手には靴を持ち裸足で歩いて来ます。異様な光景にびっくりです。後で分かりましたが、彼らは帰国の切符を持ってないので不法入国者として強制的に送還される人たちだったのです。だんだん搭乗口が近づくにつれ黒人ばかりになってきました。そのうち館内放送がありました。〇〇便は、「1時間30分ディレイ」と聞こえます。飛行機が故障で遅れると言っているようです。搭乗口からすぐそばの飛行機を見るとタイヤの交換をしていました。また1時間半も待たされるのかとうんざりでしたが待つしかありません。

黒人ばかりの中にやはり不安そうにしている白人の青年がいました。話しかけるとスイス人で同じ便に乗るそうです。少しほっとしているとまた館内放送です。「〇〇便はアンゴラ行き」と放送しています。ラゴス行きのはずと思いながら心配なのでカウンターに確認に行きましたが、私の英語では「〇〇便は何時にラゴスに着くのか」と聞くのが精いっぱいでした。一瞬広大なアフリカ大陸で迷子になりはしないか、という思いが脳裏をかすめました。私は真剣

に、仲良くなったスイス人に同じ質問をすると、若者はアンゴラに行くと言い、ラゴスに着陸してまたそこから1時間のフライトで〈〇〇便はラゴス経由アンゴラ行き〉と言ってくれたのでいっぺんに不安は解消しました。英語力の無さに我ながら情けなくなりました。

飛行機はようやく離陸しました。8時間のフライトです。水平飛行に移った時、C 化工建設の本社での打ち合わせを思い出し、またまた不安が頭をもたげてきました。同社の説明によると、ナイジェリア空港は非常に治安が悪くおまけに空港内の管理能力にも問題があるそうで入国には非常に時間がかかるそうです。担当者と次のようなやりとりをしたのを思い出しました。『担当者』—「高島さん空港に着いて入国審査が始まったらたぶん長蛇の列でしょうが、最後列に並んで待っていてください。ジョンという黒人が参ります。お尻を軽く2～3度たたき合図しますからパスポートと入国カードをお渡しください。後はスムーズに行きますから」『私』—「待ってください。パスポートを渡すのですか？自分を証明するものが無くなりますがいいのですか？何かあればどうするのですか！」『担当者』—「今まで皆さんこの方法で入国しています。間違いはありません。入国すると C 化工建設と書いた目印を持った、貴方の担当の運転手が待っています。〈エマニエル〉と言います。空港から出たら荷物から絶対に手を放さないでください。泥棒が多いですから」と、他人事のような話っぷりでした。不安が払拭できないままやっとラゴス空港に着陸しました。アンゴラまで行くスイス人とお別れし、機外に出ました。

荷物を取ってどんどん進みますがものすごい混雑でどのゲートも長蛇の列。こんな中で先方は私を探せるのかなど不安になって来ました。20分も待ったのでしょうか、さっきから私を観察していた黒人がさっさと手慣れた様子で近づいて来ました。軽く私のお尻をたたきながら、「Mr タカチマ、Mr タカチマ。

私はジョンです。「パスポートプリーズ」と言っています。私は、非常な決心をして「エイ、国際的な迷子になっても仕方ない！」と、パスポートを無言で渡しました。待つこと30分、慣れた手つきでパスポートとハンコの押された入国審査の書類が渡されました。そして先端が見えないほど並んだ人ごみの中をすいすいと入国してしまいました。すぐにジョンは次のお客様がいるらしく、また入国審査の中に戻って行きました。私は独特な匂いが充満している広い待合室にひとり取り残されました。しかし、待てど暮らせどC化工建設の目印を持ったエマニエル君は見当たりません。小一時間待っても来る気配がありません。私は意を決して鞆を肩からたすき掛けにし、2個のキャリーバッグは両手でしっかり押して広場に出ました。

そのとたん15~17歳くらいの粗末な身なりの子供たちに囲まれました。鞆やキャリーバッグに手をやって違う方向に、「マスター、マスター」と連呼しながら荷物の争奪戦をしているのです。言われていた通りでした。私はそこにしゃがんで、「ポリース・ポリースプリーズ」と絶対に手は放さないようにして大声で叫び散らしました。しばらくすると警察が飛んできました。子供たちは蜘蛛の子を散らすようにいなくなりましたが、私の荷物に手を掛けた子供は離れません。お客からバッグの運送の仕事ももらったと主張しているようでした。警察は太い警棒でゴツンゴツンとたたき始めました。子供は血を流しながら逃げて行きました。その騒ぎの中、やっとエマニエル君がびっくりしたような顔をしながら飛んできました。私を探さずに友達とおしゃべりしていたのです。車の置いてある所に行くともう一人、マイケルという運転手が待っていました。これから思いやられるな！と考え込みました。キャンプに行く道すがら沿道の住民の様子を見ていましたが、物騒で非常に貧しい生活が伺われ、現実の厳しい状況がよく分かりました。約1時間半走りましたが、空港からは比較的近いところに我々のキャンプがあり、暗くなった夕方無事に着くことができました。本当にやれやれです。

キャンプについて少し説明します。作業員を50名



ガーナ人の真面目なハウスキーパー4人のうちの2人。16~17歳位と思われます。(1980年1月)

収容できるコンテナハウスが、談話室、料理棟、食材庫を取り囲むように約30棟設置されています。金網の門を入ったところに役に立たない守衛が二人立っています。その奥に車庫があります。乗用車が4台、作業員の移動用の大きなバスが1台置いてあります。その近くにキャンプマネージャーのH氏(以下Hマネ)の部屋、私の部屋、日本人の料理人の部屋、ハウスキーパー4人(出稼ぎのガーナ人)の棟、それにメカニシャン1名の部屋と、今回の工事の司令塔とでも言える一角があります。この一角は鉄条網で囲まれて比較的安全と言えますが、我々の方が監獄にいるような感じでした。乗用車4台は私とHマネの使用する車です。車のナンバーの下一ケタの数字が奇数か偶数かによって都心に入る車が奇数日、偶数日に分けられているのです。従って4台必要なのです。コックさんは、ソ連と同じく料理会社「(株)魚国」の気のいいオヤジのTさん。メカニシャンはこのキャンプで一番大切な人ですが、当社の関係会社N商事のOさん、優秀な方で八面六臂の活躍でした。大事な発電機2台の管理、水道設備の管理、自動車の整備、冷凍設備の管理など彼が引き受けてくれた仕事は枚挙にいとまがありません。ハウスキーパー4人はまじめな人たちで一度も物がなくなるようなことはありませんでした。運転手は皆、南部の独立戦争で敗れたイボ族の軍人たちでした。概略このような体制で工事を進めて行ったわけです。次回は今回の工事のパートナーであり、キャンプの責任者でもあるHマネの人となりから続けて行きます。

(続く)